

丁寧な確認作業を加えることで、本書はより輝きを増すと思われる。

本書は、独創性のある研究書としての読み応えとともに、著者の素朴な感想から始まった長い旅路を共に見届けたような感慨を抱かせる読後感であった。

中国史に興味がある人だけではなく、ファッションにたずさわるすべての人に一読をおすすめしたい。

劉永華著

『中国の服飾史入門——古代から近現代まで』

古田真一・栗城延江訳、
マル社、2023 年刊
128 頁、1800 円＋税

国際ファッション専門職大学
李 楊

1 はじめに

本書は 4000 年以上にわたる中国の悠久の歴史を、「服飾」という特定の視点から捉え、各時代の独自の特徴を簡潔かつ明瞭に描写している。著者の劉永華氏は、上海戲劇学院で 40 年以上にわたって絵画と史論の教育に携わり、芸術分野において高い評価を受けている著名な学者である。これまでに『中国歴代服飾集萃』、『中国少数民族服飾』など、中国の服飾を中心に多数の著書を執筆し、「中国図書賞」も数回受賞した。本書評では、まずこの本が描き出した中国の服飾文化の歴史を簡潔に示し、次に本書から明らかになったことを説明する。最後に、中国の服飾史研究に関する今後の課題を述べ、本書評を締めくくりたい。

2 本書の構成と内容

まずこの本の構成について見ていきたい。本書は、中国の服飾文化を論じるにあたり、次のように年代ごとに分けられている。

上古（紀元前 1600 年以前）

殷代（前 1600 ～前 1046 年）

西周時代（前 1046 ～前 771 年）

春秋時代（前 770 ～前 476 年）

戦国時代（前 475 ～前 221 年）

秦代（前 221 ～前 207 年）

漢代（前 206 ～220 年）

魏晉時代（220 ～420 年）

南北朝時代（420 ～589 年）

隋代（581 ～618 年）

唐代（618 ～907 年）

五代十国時代（907 ～979 年）

宋代（960 ～1279 年）

遼代（907 ～1125 年）

西夏時代（1038 ～1227 年）

金代（1115 ～1234 年）

元代（1271 ～1368 年）

明代（1368 ～1644 年）

清代（1644 ～1911 年）

中華民国時代（1912 ～1949 年）

中華人民共和国時代（1949 年～現在）

考古学の研究成果によると、中国における人類活動の時期は 200 万年前に遡るとされている。太古の人々は衣服を着用せず、寒い冬には毛皮を身にまとい、暑い夏には葉や草を羽織ることで気候の厳しさを凌いでいた。夏王朝の成立（紀元前 2070 年頃）とともに中国が奴隷社会に移行した後、中国における服飾の基本的な形態と制度が徐々に成熟してきた。特に西周王朝に形成された衣冠制度は、帝王から庶民に至るまでのそれぞれの服装を規定した。たとえば、戦国時代における貴族の服装は、高級な織物を使用し、文様も華やかで、庶民のものとは明確に区別された。全

体的には、秦の統一以前の服装は、中国の服飾史の基礎を形成する段階といえる。

秦の始皇帝は中国を統一した後、安定した政権を守るために、戦国時代における各国の制度の優れた点を取り入れ、服飾、法律、言語、度量衡を含む多くの分野で統一した制度を設けた。中でも服飾制度は、特に厳格だったとされている。たとえば、秦始皇帝陵で出土された兵馬俑を見ると、将軍から兵士に至るまで軍服はほぼ統一されている。秦を滅した漢は、服飾政策を含め、秦王朝から多くの制度を受け継いだ。豊富な文字資料と実物資料によると、秦王朝に比べて漢王朝の服装は高い技術力を示している。たとえば、長沙市郊外の馬王堆漢墓から出土した素紗单衣は、50 グラムにも満たず、現存する最も古く、薄く、そして軽い衣服として知られている。

しかし、魏晋南北朝時代になると、戦争により社会経済が破壊され、王朝の入れ替わりも頻繁に起こった。このような戦争に伴う政治的不安が人々の移動や民族の雑居を引き起こし、その結果として民族間の交流や融合が促進された。服装の変化はこの文化交流の影響を受けた代表的なものの1つといえる。秦漢王朝は広くゆったりした服装を着用する傾向があったが、魏晋南北朝時代になると、体にフィットした短い上着にズボンをはく北方遊牧民族の服装スタイルが急速に普及した。

隋唐王朝の時代、南北が再び統一された。隋王朝の支配年数は短かったが、その服飾文化は基本的に南北朝時代のスタイルを引き継いでいた。たとえば、当時の女性の衣服は、短い丈の上衣と、胸の高さで帯を締めた非常に長いスカートというスタイルであった。唐の時代になると、国が勢いを増し、より開放的で進歩的な社会が形成された。それを反映した服飾は華麗で斬新であり、中国の服飾史の中でも特に輝かしい時期とされている。

宋王朝の服飾は、基本的に五代のものを踏襲し、晩唐との明らかな継承関係が示された。

しかし、唐王朝のような目新しく華麗な服飾スタイルとは異なり、宋王朝は素朴、清潔感を重視する服飾文化が示された。たとえば、宋代の皇帝が公式な場において着用した袍服は、装飾が施されておらず、表面も無地であった。

遼、金、西夏、元の各王朝は、いずれも少数民族が支配する政権であり、これらの王朝の共通点は、自身の民族と漢民族の両方の服装の着用が許可されることである。たとえば、官服においては、皇族や貴族は自身の民族の服装を着用し、それに対して漢民族出身の官僚や一般庶民は、唐や宋時代のスタイルの官服や漢服を着用した。

漢民族が統治した明王朝では、以前の少数民族政権によって制定された服飾制度が引き起こした混乱を回避するために、開国の初めから、元王朝時代の服装は全面的に禁じられ、唐宋王朝の服装の着用が義務付けられた。これにより、少数民族の衣装の多くの特徴が漢民族の衣装に包摂された。また明王朝の官服は階級ごとに厳格に定められ、たとえば、文官や武官の配偶者は、夫や息子の官服に準じた朝服を着用し、頭には鳳冠を戴く必要があった。

明王朝の末期に、東北地域に残った満州族は勢力を拡大し、最終的に清王朝を建立した。清王朝では、遼や金が漢民族との同化によって弱体化した過去を教訓に、服飾政策に関して一連の厳格な措置を打ち出した。しかし当時は、漢民族の反発が強く、清政府が「男は従うが、女は従わない」という妥協策を採用せざるを得なかった。その結果、漢民族の女子は伝統的な服装スタイルを維持し、漢民族の男子は基本的に満州族の服装スタイルをとることになった。

清末以前には、服飾は着用者の社会的身分や階級を示す重要な手段であった。そのため、各王朝は、身分秩序の可視的表象としての服飾制度を定めていた。しかし清末以降、国民は従来の厳格な服飾制度から徐々に解放

され、誰もが自由に服飾を選択できるようになった。とくに 1912 年の中華民国成立後、戦争の影響を受けていない沿岸都市において、服飾が西洋化する傾向が見られた。当時、資本家層や俸給生活者を中心にした都市の中産階層は、西洋文化を積極的に受け入れ、多くの人々が洋服を着用し、革靴を履くようになった。さらに、中華民国政府の臨時大總統に就任した孫文は、服装の変化がもつ政治的意義を深く認識し、特定の価値観と政治思想を反映する中山服を考案した。中国の伝統文化を象徴する重要な服装として、中山服は中華民国時代における外交用の礼服と公務員の制服に採用された。

1949 年から 1978 年にかけての中華人民共和国の計画経済時代には、食べることだけで精一杯の国民にとって、日常生活に必要な衣料品を購入するのみで十分であった。当時、国民の服装は画一的な傾向を示し、改良が施された中山服は「国民服（人民服）」として定められ、政府の指導者から一般庶民に至るまでの日常着となった。しかし改革開放政策の推進に伴い、以前のように年齢や季節に関係なく同じデザインの衣服を着る生活様式は一掃された。海外からのファッション情報を積極的に取り入れ、洋服の着用を通じて自分の個性、社会的地位を示したいという考え方が国民の中に徐々に広がった。

3 評価

本書から明らかになるのは、以下の 3 点である。

数千年にわたる中国の服飾文化の進化は、物質的および精神的営みの積み重ねを映し出すだけでなく、一般庶民の勤勉な知恵と豊かな創造力をも反映している。近代に入り、西洋の工業文明の波によって、西洋の服飾文化が中国にも流入したのちも、中国がかつて「衣冠の王国」と称された誉れは損なわれることはなかった。したがって、服飾は中国におけ

る社会政治構造、文化的価値観、科学技術の変遷を理解するための重要な糸口なのである。

1 冊の本の中で中国の服飾史の全貌を明らかにすることはきわめて難しい。それにもかかわらず、著者は中国国内各地の博物館に所蔵された遺品や絵画、歴史書や文学作品などの文献史料に基づき、各少数民族を含めた中国の各種服飾の造形美、色彩の魅力、そして装飾の美しさを述べたほか、時代ごとの風習や化粧の流行、そしてスタイリングの多様性などにも触れている。本書のような中国の服飾の歴史的な変遷を幅広い視点から総体的かつ簡潔にまとめた著作は、恐らくなかったと評価したい。

最後に、本書は各時代の服飾の要点を文章で的確に捉えつつ、鮮やかなイラストによって生命感が与えられている。イラストと文章の両方が見事に調和しており、考古資料と文献史料を参照しながらも、その内容の表現は非常に分かりやすく平易である。これは著者の長年の教育経験と実践経験から切り離すことができない。したがって、美術や服飾に携わる実務家や中国の服飾文化に関心をもつ一般読者にとって理想的な読み物だろう。さらに、入門書として書かれているため、教育者向けの参考図書としても適切かもしれない。

4 今後の課題

「あとがき」に記されているように、衣服はただ単に外見的な美しさを追求した生活用品ではなく、実際には中国の文化、歴史、科学技術、芸術、風俗、信仰など、さまざまな側面を表すものである。本書評では、法律制度や民族融合の視点を踏まえ、中国の服飾変遷を簡潔に整理してみた。しかし、服飾や衣生活をめぐる現象を包括的に理解するために、本書のような服飾史的なアプローチだけではなく、社会科学的なアプローチも取り入れて分析する必要がある。評者の専門である

マーケティングの分野から見れば、既制服の流通は中国の服飾史を理解する上での重要な視点と考えられる。なぜなら、中国では、国民の日常着の縫製が長期にわたり家庭労働として主婦や、身体に合わせて個別に縫製する行商人によって行われていたが、既制服の登場により、家庭内での縫製は徐々に衰退したためである。したがって、今後はより多様な視点から中国の服飾史を議論する必要があるだろう。

5 まとめ

以上、本書の概要および評者の意見を簡潔に述べたが、本書のすべての魅力を的確に伝えきれていないという懸念がないわけではない。しかしながら、中国の服飾史の入門書として、評者は自分の関心に基づいて伝えるべきと感じた点を示した。もし少しでも興味をもたれた方がいれば、ぜひ本書をご覧ください、多くことをお勧めしたい。

<参考文献>

- 華梅 2003『中国服装史——五千年の歴史を検証する』施潔民訳、白帝社。
劉雲華 2009『紅幫裁縫研究』浙江大学出版社。

フィリップ・ペロー著

『衣服のアルケオロジ——服装からみた 19 世紀フランス社会の差異構造』

大矢タカヤス訳、筑摩書房、2022 年刊
464 頁、1500 円＋税

国際ファッション専門職大学
平野 大

歴史学者、フィリップ・ペローによる名著、
『衣服のアルケオロジ——服装からみた 19

世紀フランス社会の差異構造』の待望の復刊である。

文庫版訳者のあとがきにもあるように本書の日本語版は、1985 年に出版された後、「一年か二年で絶版」（本書、452 ページ）にされてしまったのだ。

本書は、ファッションを研究する者にとっての必携の書である。それが、この早すぎる絶版により、限られた図書館でしか手にすることができない状態が、長年続いていた。この度の復刊によって、ようやく、この名著を手元に置き、じっくり熟読することができるようになった。本当に悦ばしい限りである。文庫版での復刊というのも重要なポイントである。これにより、本書がより多くの読者の目に触れることとなる。このことは、今後のファッション学の発展にも少なからずポジティブな影響を与えるはずである。

本書の構成は以下の通りである。

序章

- 第 1 章 外見の歴史
- 第 2 章 衣服の旧制度と新制度
- 第 3 章 十九世紀の衣服の風景
- 第 4 章 衣料購入の伝統的方法と既制服産業の飛躍的發展
- 第 5 章 百貨店、そしてブルジョワの衣服の普及
- 第 6 章 新たな野望、新たな区別
- 第 7 章 作法の諸規則
- 第 8 章 規範からの逸脱
- 第 9 章 見えない衣類
- 第 10 章 モードの伝播
- 結論

本書のテーマは、19 世紀ブルジョワジーの衣服である。ペローは、19 世紀ブルジョワジーの衣服体系を探求するにあたり、まず衣服が持つ多様な要素（記号としての衣服、美としての衣服、遮蔽物としての衣服、誘導要素としての衣服）について整理していく（第